

第6回イルカとウマの読書会 2020/11/21

『アクロイド殺し』 アガサ・クリスティー

●録音前(18:05～)

・自己紹介と近況報告

お名前(本名で)、略歴、好きな作品、最近みた作品、物語への興味、趣味、近況報告。

・作品についての感想・分析

ここより、録音開始(18:50 ぐらい)

「イルカとウマの文学村」とは？

ここは、おはなし好きな人が集まるちいさな村です。サイト開設当初の「文学村」という名称を残していますが、文学に限らず「物語」「おはなし」好きの人の集まるサイトにしたいと思っています。書くのや語るのが好きな人も、読むのや聴くのが好きな人も、お茶でも飲んで、ゆっくりしてってください。(2020/04/24 更新) ★物語論を語る人たちと、それぞれの目的(三幕構成 29)

①三幕構成とは何か？

・物語は「変化」と「ミステリー」である。

・ビートシートについて。★三幕構成 Q&A⑨「ビートシートって何？」

・「ターンオーバー」について。★「ツイスト」と「ターンオーバー」(三幕構成 28)

カ学や構成上で「ターンオーバー」を置くべきタイミング(※合評会にて)

・「ジャンル」と「エンジン」のちがい。

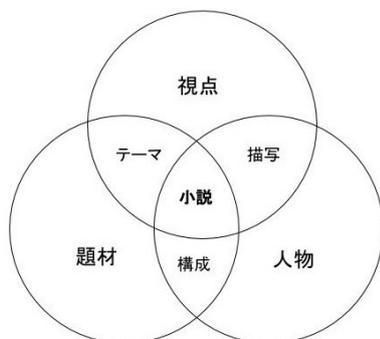
・「サスペンス」と「ミステリー」のちがい。ギアチェンジ。

サスペンスオンリーなのは→ミッションプロットなど

「バルカン超特急」「バニーレイクは行方不明」「フライトプラン」「チェンジリング」「ブレーキダウン」

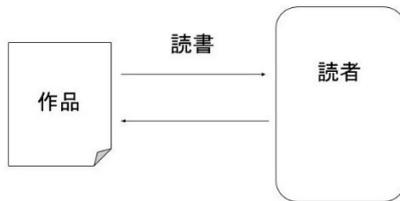
★「ストーリーエンジン」(三幕構成 26)/ストーリーエンジンの実例(三幕構成 27)

②ストーリーサークル ★「小説らしさ」とは？(「100文字小説大賞」の選考基準)

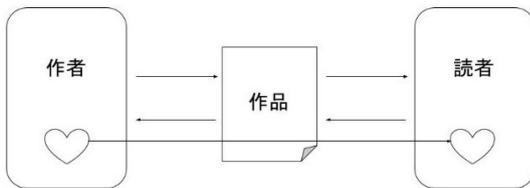


③文学の意義

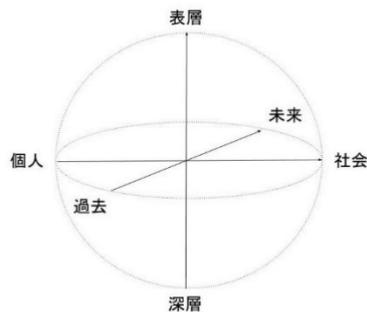
●「作品」として読む



●作品に宿る「声」を聴く



●集合的コミュニケーション



- ★【物語に敬意を払うこと】(文学#27)
- ★【物語の価値とは?】(文学#28)
- ★【文学が闘うべきもの】(文学#29)
- ★【ライターのコア】(文学#16)
- ★【ライフワーク】(文学#17)

★【ジョーゼフ・キャンベルの宇宙創成の円環】

「現代に生きる人間の課題は、絶大な統合機能を持つ神話——現在では「作り話」とされる——が語られていた、相対的に安定した時代を生きた人間の課題とは正反対なのである。かつて、意味はすべて集団の内部、巨大で無名のかたちの中にあり、自己表出する個人の中にはなかった。ところが現代社会では、意味は集団の内部にはなく、世界もない。すべての意味は個人の中にある。しかし、その意味も完全に見失われている。そのため現代人は、どこに向かって進めばいいのかわからない。自分を駆りたてるものが何なのかわからない。人間の意識と無意識の領域をつなぐ線はすべて断ち切れ、私たちは二つに分断されている。

現代においてなされるべき英雄の偉業は、ガリレオの時代におけるそれとは異なっている。かつて暗かった場所は、いまでは光がさして明るい。ところが、かつて明るかった場所は、いまでは暗い。調和する魂が住まっていた、失われたアトランティスに、再び光りをともし旅に出る行為こそ、現代の英雄がなすべきことなのである。」(『千の顔をもつ英雄[新訳版]下』ジョーゼフ・キャンベル著、倉田真木、斎藤静代、関根光宏(翻訳)、ハヤカワ・ノンフィクション文庫)

④作者について (Wikipedia 等を参考)

アガサ・メアリ・クラリッサ・クリスティ(1890年9月15日-1976年1月12日)

イギリス生まれの推理作家である。発表された推理小説の多くは世界的なベストセラーとなり「ミステリーの女王」と呼ばれた。英国推理作家のクラブであるディテクションクラブの第4代会長。



by [Le Salon de la Mappemonde](#)

1890年9月15日 イギリスの保養地デヴォンシャーのトーキーにて、フレデリック・アルヴァ・ミラーと妻クララの次女、アガサ・メアリ・クラリッサ・ミラーとして生まれる。正規の学校教育は受けず母親から教育を受ける。

1901年 父が死去。この頃から詩や短編小説を投稿し始める。なお、詩や小説を書くことになった理由は、インフルエンザにかかり、読む本がなかったからだという。(※『緋色の研究』は1887年発表)

1909年 自身初の長編小説『砂漠の雪』を書き、作家イーデン・フィルポッツの指導を受ける。

1914年 アーチボルド・クリスティ大尉と結婚。第一次世界大戦中には薬剤師の助手として勤務し、そこで毒薬の知識を得る。

1919年 娘ロザリンド・ヒックスが誕生。

1920年 数々の出版社で不採用にされたのち、ようやく『スタイルズ荘の怪事件』を出版、ミステリ作家としてデビューする。

1926年 『アクロイド殺し』を発表。フェアかアンフェアかの大論争がミステリ・ファンの間で起き、一躍有名に。また、母が死去する。この年アガサは謎の失踪事件を起こす。

1928年 アーチボルドと離婚。アーチボルドは愛人と再婚。

1930年 中東に旅行した折に、14歳年下の考古学者のマックス・マローワン(1904年5月6日 - 1978年8月19日)と出会い、9月11日再婚する。

1938年 グリーンウェイの別荘を購入。以後、毎年夏の休暇をここで過ごす。

1943年 『カーテン』および『スリーピング・マーダー』を執筆。死後出版の契約を結ぶ。孫マシュー・プリチャードが誕生。(※『カーテン』はポアロ最期、『スリーピング・マーダー』はミス・マーブルの最後)

1952年 書き下ろしの戯曲『ねずみとり』の世界最長ロングラン公演(1952年11月25日 -)始まる。

1955年 MWA 賞巨匠賞 受賞。

1956年 大英勲章第3位 (CBE) 叙勲。

1971年 大英勲章第2位 (DBE) 叙勲。

1973年 『運命の裏木戸(英語版)』を発表。最後に執筆されたミステリ作品となる。

1975年 『カーテン』の発表を許可する。

1976年1月12日 高齢のため風邪をこじらせ静養先のイギリス、ウォリングフォードの自宅で死去。死後『スリーピングマーダー』が発表される。遺骸は、イギリスのチオルシーにあるセント・メアリ教会の墓地に埋葬された。

2009年には『犬のボール』など未発表短編 2篇が発見され、創作ノート『アガサ・クリスティの秘密ノート(上・下)』とともに公刊された。

⑤代表作

●クリスティ・ファンクラブベストテン

100名近いクラブ員が各作品を10点満点で評価したベストテンです。1982年に実施されました。
(アガサ・クリスティ・ファンクラブ <http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~lilac/christie/index.htm>)

- 1『そして誰もいなくなった』
- 2『アクロイド殺し』
- 3『オリент急行の殺人』
- 4『予告殺人』
- 5『ナイルに死す』
- 6『カーテン』
- 7『ゼロ時間へ』
- 8『ABC殺人事件』
- 9『葬儀を終えて』
- 10『白昼の悪魔』

●**東西ミステリーベスト 100** は、1985年に『週刊文春』で実施された、推理小説のオールタイムベスト選定企画。推理作家や推理小説の愛好者ら約500名がアンケートに回答し、結果は『週刊文春』1985年8月29日号および9月5日号で発表された。1986年12月には文藝春秋編『東西ミステリーベスト 100』として文春文庫より刊行された。2012年、『週刊文春』2013年1月4日臨時増刊号として、リニューアル版が27年ぶりに発表された。

海外編 1985年版

1	エラリー・クイーン	Yの悲劇	1933
2	ウィリアム・アイリッシュ	幻の女	1942
3	レイモンド・チャンドラー	長いお別れ	1954
4	アガサ・クリスティ	そして誰もいなくなった	1939
5	ジャック・ヒギンズ	鷺は舞い降りた	1975
6	ギャビン・ライアル	深夜プラス1	1965
7	F・W・クロフツ	樽	1920
8	アガサ・クリスティ	アクロイド殺し	1926
9	S・S・ヴァン＝ダイン	僧正殺人事件	1929
10	アーサー・コナン・ドイル	シャーロック・ホームズの冒険	1892
34	アガサ・クリスティ	オリент急行の殺人	1934

2012年版

1	アガサ・クリスティ	そして誰もいなくなった	1939
2	エラリー・クイーン	Yの悲劇	1933
3	アーサー・コナン・ドイル	シャーロック・ホームズの冒険	1892
4	ウィリアム・アイリッシュ	幻の女	1942
5	アガサ・クリスティ	アクロイド殺し	1926
6	レイモンド・チャンドラー	長いお別れ	1954
7	ウンベルト・エーコ	薔薇の名前	1980
8	G・K・チェスタトン	ブラウン神父の童心	1910
9	トマス・ハリス	羊たちの沈黙	1988
10	ジョン・デクスン・カー	火刑法廷	1937
11	アガサ・クリスティ	オリент急行の殺人	1934
62	アガサ・クリスティ	ABC殺人事件	1936

●日本編 1985年版

1	横溝正史	獄門島	1947
2	中井英夫	虚無への供物	1964
3	松本清張	点と線	1957
4	坂口安吾	不連続殺人事件	1947
5	小栗虫太郎	黒死館殺人事件	1934
6	夢野久作	ドグラ・マグラ	1935
7	横溝正史	本陣殺人事件	1946
8	鮎川哲也	黒いトランク	1956
9	連城三紀彦	戻り川心中	1980
10	高木彬光	刺青殺人事件	

●2012年版

1	横溝正史	獄門島	1947
2	中井英夫	虚無への供物	1964
3	島田荘司	占星術殺人事件	1981
4	夢野久作	ドグラ・マグラ	1935
5	宮部みゆき	火車	1992
6	松本清張	点と線	1957
7	天藤真	大誘拐	1978
8	綾辻行人	十角館の殺人	1987
9	京極夏彦	魍魎の匣	1995
10	横溝正史	本陣殺人事件	1946

●The Top 100 Crime Novels of All Time(1995年、英国推理作家協会が出版した書籍リスト)

1	ジョセフィン・テイ:『時の娘』
2	レイモンド・チャンドラー:『大いなる眠り』
3	ジョン・ル・カレ:『寒い国から帰ってきたスパイ』
4	ドロシー・L・セイヤーズ:『学寮祭の夜』
5	アガサ・クリスティ:『アクロイド殺し』
6	ダフニ・デュ・モーリエ:『レベッカ』
7	レイモンド・チャンドラー:『さらば愛しき女よ』
8	ウィルキー・コリンズ:『月長石』
9	レン・デイトン:『イプクレス・ファイル』
10	ダシール・ハメット:『マルタの鷹』
19	アガサ・クリスティ:『そして誰もいなくなった』
83	アガサ・クリスティ:『死が最後にやってくる』

●The Top 100 Mystery Novels of All Time(1995年、アメリカ探偵作家クラブが発表した同趣旨のリスト)

1	アーサー・コナン・ドイル:シャーロック・ホームズシリーズ全作品
2	ダシール・ハメット:『マルタの鷹』
3	エドガー・アラン・ポー:作品集
4	ジョセフィン・テイ:『時の娘』
5	スコット・トゥロー:『推定無罪』
6	ジョン・ル・カレ:『寒い国から帰ってきたスパイ』
7	ウィルキー・コリンズ:『月長石』
8	レイモンド・チャンドラー:『大いなる眠り』
9	ダフニ・デュ・モーリエ:『レベッカ』
10	アガサ・クリスティ:『そして誰もいなくなった』
12	アガサ・クリスティ:『アクロイド殺し』
19	アガサ・クリスティ:『検察側の証人』 / 41 アガサ・クリスティ:『オリент急行の殺人』

⑥作品の分析 ※分析表を参照しながら

●ログラインと構成

「わたし」は田舎村で起きた殺人事件を名探偵ポアロと捜査していき、犯人が「わたし」である真相を突きとめられる。

PP1:ポアロの捜査開始

アクト2前半:捜査

MP:容疑者を集めて「みんながウソをついている」

アクト2後半:秘密の告白

PP2:チャールズ・ケントの逮捕

アクト3:再度集めて、謎解き

●ポイント:

・PP1の捜査開始はミステリープロットのセオリー通り。中心がシェパードからポアロに移る。シェパードは相棒になるが真の動機が不明。ペイトンに罪を被せたいのか？ ミスリードより読者から隠すことでキャラが不自然。

・MPで容疑者集合はクリスティーのセオリー。

・PP2は形式的。展開的には進展していない。プロットアークはチャールズ・ケントを探していた訳ではない。ペイトンであれば機能していた。ペイトンの登場は「ターンオーバー」のために不自然に遅れている。ストーリー上できない？ 本当にできなかったらどうか？ 真犯人のシェパードにキャラクターとしての動機やドラマがないので犯人とバレたら物語が終わってしまう。

・ストーリーサークルでみると……「ターンオーバー」で驚かせるための「構成」だけがメインになっている。物語に独自の「視点」はない(クリスティー全般か)。「キャラクター」はキャロラインが◎ ポアロの魅力は？ 探偵キャラのセオリー。麻雀のシーンも魅力的。

・ストーリーエンジンでは「ミステリー」のみ。「サスペンス」は働いていない。連続予告殺人である『そして誰もいなくなった』や『ABC殺人事件』は次の殺人が起こるというサスペンスが働いている。

・「信頼できない語り手」について(『フィクションの修辞学』ウェイン・ブース)(Wikipediaより)

「語り手が作品内の規範(それはいわば、暗黙の著者の持つ規範でもある)に対し、代弁していたり従っていたりするときは、語り手のことを信頼できると呼び、そうでない場合は信頼できないと呼んできた」

・ウィリアム・リガン(William Riggan)による1981年の研究(Wikipediaより)

悪党(Pícaro):誇張や自慢の激しい語り手である。

狂人(Madman):自我が不安に陥るのを防ぐために感情を抑圧したり、軽い解離や離人症に陥ったりするなど、防衛機制を働かせているだけの語り手もいれば、統合失調症や偏執病に陥るなど重度のパーソナリティ障害に陥っている語り手もある。自己疎外に陥っているフランツ・カフカの小説の語り手や、タフでシニカルな語りをする事で自分の感情を隠そうとするノワール小説やハードボイルドの語り手も含まれる。

道化(Clown):自分の語りを真剣に受け止めず、対話や真実といったものを意識的にもてあそび、読者の期待を翻弄する語り手である。

世間知らず(Naif):ものごとの認知が未熟な語り手や、ものごとの認知に限界のある視点に立つ語り手などである。

嘘つき(Liar):健全な認知力をもつ成熟した人物だが、過去の不穏当な行動や信用に傷をつけるような行動をあいまいにするため、わざと自分自身のことを事実を曲げて語るような語り手である。

★文章テクニク 14「サブテクストをセリフから考える」/★文章テクニク 15「サブテクストを描写から考える」

・複数の信頼できない語り手→同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に』(Wikipediaの分類、情報源不明)

・映画の例: 1995年の映画『ユージュアル・サスペクツ』

・「ターンオーバー」を機能させるために作者がやったことは？

①事件の複雑化

アクロイドが殺された日に……セシル・アクロイド夫人が遺言を見ようと忍びこみ、フローラは40ドルを盗み(そのためにウソをつき)、召使いのアーシュラ・ボーンがペイトンと会っていて(ペイトンはフローラと婚約していたが実は夫婦だった)、ミス・ラッセルはチャールズ・ケント(実は母子)と会っていて、パーカーは脅迫しようと盗み聞きしていて、シェパードが尋ねたタイミングでフェラーズ夫人の手紙が届いた。数日前に録音機の営業マンが来ていて、Rというイニシャルの共通(レイモンド/ラルフ/ロジャー)。

②キャララインによるミスリード

刑事の捜査については、読者は信じない。キャララインも同等だが、彼女がポアロと会うようになってから真実が含まれている。サブプロットにもなっている。ポアロはシェパードを相棒にしているようで、途中からはキャララインを相棒にしている。ちなみにもう一つのサブプロットはフローラとブラントの恋愛。

③シェパードの心理は隠していない(フェア)

p.18 「書き進める前に」……筆記であることが示されている

p.38 「投機に失敗した」……シェパードの脅迫と殺害の動機 p.

p.51～ 「黒い靴」など……殺害の様子についての正確な描写

p.120 フローラに「じゃあ、どうしてゆうべ、スリー・ボアーズ館に行ったんですか？」と聞かれ「宿屋を訪れたことは、誰にも知られなくなかったのだ」。ペイトンに最後に会ったのはシェパードだったと明示。

p.125 「ゆうべ、家に帰る途中、この宿屋——スリー・ボアーズ館——に寄ったのですね？」わたしが話を終わると、ポアロはたずねた。「ところで、その理由は正確にいうと何だったのですか？」わたしは少し考えこみ、入念に言葉を選んだ。「青年に伯父上の死を伝えるべきだと思ったのです。ファンリー・パークを出たあと、わたしとアクロイド以外には、彼がこの村にいることを誰一人知らないかもしれない、と気づいたのです」ポアロはうなずいた。「まさしく。では、あそこに行った動機は、それだけだったのですか？」「それだけの理由です」わたしはぎこちなく答えた。

④ポアロの捜査

p.211 キャロラインとの会話「あの日、森の中で立ち聞きしたことをムッシュー・ポアロにしゃべったのか？」

p.233 ポアロ「わたしは専門家を雇うのが好きなのです」……相棒がキャララインに変更。「どうして真実を話してくれなかったのですか？」……ポアロから非難される。

p.245 MP「以上のように記録したポアロとの夜の会話のあと、事件は別の段階に入ったように思う。事件をふたつに分けることができ、それぞれがきわめて明瞭に、区別できるのである。前半は金曜夜のアクロイドの死から翌週の月曜の夜まで。こちらはエルキュール・ポアロの目に映ったとおりに、事件の経過をありのままに書き連ねた。わたしは常にポアロのかたわらにいた。彼が見たものをわたしも見た。彼の心を読もうと、全力を尽くした。今にして思えば、これには失敗した。ポアロは発見したものをすべてわたしに見せてくれた——たとえば、金の結婚指輪とか——しかし、自分が頭の中で組み立てた、きわめて重大な、しかも論理的な考えは隠していたのだ。のちに知ったことだが、この秘密主義はポアロ特有のものだった。ヒントやほのめかしはいくつも与えるが、それ以上は教えようとししないのだ。このように、月曜の夜までの話は、ポアロ自身が語っているも同然だった。彼がシャーロック・ホームズで、わたしはワトスン役を務めた。しかし、月曜以降、わたしたちは別々の道を行くことになった。ポアロは**自分の仕事**で忙しくなった。彼が何をしているのかは知っていた。キングズ・アボットではあらゆることが耳に入ってくるからだ。しかし、彼はまえもってわたしに打ち明けてくれようとしなかった。そして、わたしはわたしで自分の用事があった。(中略)だがそのことはあとで説明しよう……すべての出来事を厳密に時系列に並べるとしたら、セシル・アクロイド夫人からの呼び出しについて、まず話しておかなければならない。」

- p.261 「キャロラインは家にいた。ポアロが尋ねてきたので、上機嫌で、鼻高々になっていた」……後で出てくるが、このときの精神病院について調べていたと思われる。
- p.292 麻雀中、ミス・ガネットが「わたし、今日の午後、クランチェスターに通じる道を散歩していたの。そうしたら、ムッシュ・ポアロが向こうから車でやって来たのよ」……精神病院を調べに行っていた。
- p.313 そのことを問われてポアロは「ああ、あれですか！ ただ歯医者に行っただけですよ。それだけです。歯が痛くなりまして。向こうに着いたら、すぐによくなりました。急いで引き返そうとしますと」……見え見えのウソ。
- p.316 「ある男のことを考えてみましょう」……シェパードのことを言っている。
- p.367 シェパード「そういえば、ムッシュ・ポアロに頭のいかれた甥がいるなんて、知らなかったよ」キャロライン「知らなかったの？ あら、わたしにはすっかり話してくれたわよ。かわいそうにね。一族全員にとって、大きな悩みの種みたい。これまでは自宅で世話してきたけど、具合がとて悪くなってきているので、いずれどこかの施設に入れなくてはならないと心配しているんですって」
- p.414 「医者若い男を隠すとしたら、どこを選ぶでしょうか？ 手近な場所ではなくてはなりません。わたしはクランチェスターを思いつきました。ホテルか？ いいえ。下宿屋？ いいえ。もっと不適當です。では、どこでしょう？ ああ！ 閃きました。療養所です。精神障害者のための施設。わたしはその仮説を試してみました。精神障害の甥がいると偽り、適当な施設がないだろうかとマドモアゼル・シェパードに相談したのです」

・『アクロイドを殺したのはだれか』ピエール バイヤール

アカザ・クリスティーの代表作として、またミステリー史上最大の問題作として知られる『アクロイド殺害事件』の犯人はその人物ではない—文学理論と精神分析の専門家バイヤール教授が事件の真相に挑戦、名探偵ポワロの「妄想」を暴き出し、驚くべき(しかし十分に合理的な)真犯人を明らかにする。「読む」ことの核心に迫る文学エッセーとしても貴重なメタ・ミステリー

バイヤールピエール

1954年、パリ生まれ。パリ第八大学教授。文学を精神分析に応用する「応用文学」の提唱者であると同時に分析療法の実践家でもある(Amazonの商品解説より)

録音終了(20:00ぐらい)

以降、「作品合評会」に入ります。

ビートの詳細な解説

- ・「ターンオーバー」で成功している映画について
『マトリックス』『ビューティフルマインド』『シックスセンス』『ジョーカー』
- ・その力学と構成上「ビート」をどこへ置くべきか？
- ・受賞作について

次回の読書会

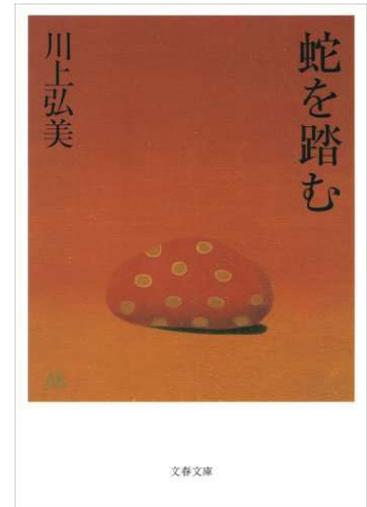
2020/1/30 (土)

18:30～21:00(18:05 開場)

『蛇を踏む』 川上弘美

ミドリ公園に行く途中の藪で、蛇を踏んでしまった。蛇は柔らかく、踏んでも踏んでもきりがなかった。「踏まれたので仕方ありません」人間のかたちが現れ、人間の声が出て、蛇は女になった。部屋に戻ると、50 歳くらいの見知らぬ女が座っている。「おかえり」と当たり前の声でいい、料理を作っていた。「あなた何ですか」という問いには、「あなたのお母さんよ」と言う……。

母性の眠りに魅かれつつも抵抗する、若い女性の自立と孤独を描いた、第 115 回芥川賞受賞作「蛇を踏む」。“消える家族”と“縮む家族”の縁組を通して、現代の家庭を寓意的に描く「消える」。ほか「惜夜記」を収録。(Amazon 作品解説より)



合評会について

- 参加資格： 読書会の参加者
 形式： プロット or シノプシス
 枚数： A4 で 2 枚以内 (形式自由)
 参考テーマ： 自殺
 〆切： 読書会の前日

- ・〆切がないと「書き上げる」のはむずかしい。
- ・他人の感想を聞けるのは作者にとって勉強になる。多くのスクールでも似た形式をとっている。
- ・ただの褒め合い、けなし合いにならないよう三幕構成の観点を重視。「読書会」と合わせての開催。
- ・匿名で一方的に言われるのと違う。目の前で言われたことは真摯に受けとめられるし、意見を言う方でも、面と向かって言うのは覚悟がいる。作者は意見に従う義務はないが耳を傾けてみるべき。
→参加者のみでの合評会としている。
- ・キレない、へこまない、ウカれない
- ・不安な点はサポートいたします。

■用語解説（詳しくは「イルカとウマの文学村」サイトをご参照ください）

フック: 観客の気持ちを惹きつけるもの、要素。

ログライン: 「誰が、何して、どうなる」と物語を構造的に要約したもの。

ビート: 三幕構成上の要素。楽譜の音符のようにとらえるとわかりやすい。

ビートシート: ビートを一覧にしたもの。ハリウッドでは企画書がわりにも使われる。

●第一幕(アクト1): 主人公は日常の世界で暮らしている。そこへ冒険への誘いを受けて「旅」へ出るまで。

「オープニングイメージ」Image1: 冒頭でテーマを映像や音楽、アイテムで伝えます。

「ジャンルのセットアップ」GenreSet: コメディやアクションといったジャンルを明確にしておきます。

「主人公のセットアップ」CC: 主人公を紹介します。ここまでが主人公の日常の世界です。

「カタリスト」Catalyst: 最初の事件が起きます。冒険への誘いともいえます。

「ディベート」Debate: 冒険へ出ることに迷ったり、誰かに禁止されたりします。

「デス」Death: 危機が迫り冒険を決意します。あるいは禁止がなくなります。

「プロットポイント1」PP1: 「門」をくぐり冒険へと旅立ちます。

●第二幕(アクト2): 冒険に出た主人公は目的地を目指して進んでいきます。非日常の始まり。

「バトル」Battle: 主人公は試練、戦い、ミッションを経て成長していきます。

「ピンチ 1」Pinch1: 冒険の途中で新しい出逢いがあります。

「ミッドポイント」MP: ここで勝利(あるいは敗北)して「宝物」(リワード Reward)を得ます。

「フォール」Fall: 冒険の折り返し。帰り道(帰還)が始まります。あるいは強敵の出現。

「ディフィート or ピンチ2」Pinch2: 強敵に敗北(あるいは勝利)します。仲間のイベントが入ることも。

「プロットポイント2」PP2(AisL): 主人公の「旅」は終わります。オールイズロストともいいます。

「ダーク・ナイト・オブ・ザ・ソウル」DarkNight: 主人公は一時的に迷います。

●第三幕(アクト3): 主人公は改めて決断して最終決戦へ挑む。

「ターニングポイント2」BB(TP2): 主人公は決断します。ビッグバトルのスタート地点。

「ビッグバトル」最終決戦。途中ではツイストも入り、ビッグフィニッシュ(Big Finish)で終わります。

「ファイナルイメージ」Image2: エピローグ。結論としてテーマを再提示します。